

ある夜。旅する小さな青い星が、もうひとつの星とすれちがった。

すべての星は旅をしている。それぞれの道を、それぞれの灯をかかげて。

小さな星はもうずいぶん長いことひとりの道行きだったから、彼の心の鐘は、よろこびにふるえた。

その音色が相手にも届いたのだろう。

大きな赤い星は歩みをゆるめ、小さな星に寄りそうように進みはじめた。

見たところ、赤い星はかなりの年寄りのようだ。それならば、このところ自分が抱いてきた謎について何か知っているかもしれない。

小さな星は自分の灯を相手に向けてさしのべた。赤い星もそれに応じ、2つの火が重なりあった。互いの灯をわかちあうことは、相手への賛辞をしめす星のあいさつだ。

小さな星はおそろおそろ、呼びかけた。

「大きな赤い星よ、貴方はあれが何か知っていますか？」

小さな星が射す方には、燦然とかがやく光があった。やわらかな金色の煙をあげて、すき透った火がゆれている。まるでみずうみや、巨きな瞳のように。

「あれはいったい何の火でしょう。もう百年もの間、燃えつづけているのです」

赤い星は静かにうなずき、答えた。

「あれは、星が死んだのだ。旅を終えた星は、ああして自らを灼くのだよ」

「なぜ、己の身を灼くのです？わたしはこの旅の終わりにどんなことが待っているのか、ずっと想ってきました。この孤独の果てにはきつと、美しいよいことが待っているにちがいないと。それなのに、ただ消えてなくなるなんて、あまりに寂しい」

小さな星の溜め息に、赤い星は微笑んだ。もう千年も昔、自分も青い星と同じ想いを抱いたものだった。

「哀しむことなど、なにもない。あの火をよくご覧、何が見えるかね？」

小さな星は、せいっぱい目をこらした。

「白い砂粒ほどの光が見えます。おや、あれは星だ。生まれたての星の子どもだ」

赤い星はうなずいた。

「その通りだよ。いつかお前が生まれたのも、あのような場所だったろう。あの火は、死を哀しんでいるのではない。生まれくるものを祝う生誕の火だ。死んだ星の物語は、あの火の中でのみ受け継がれる。知恵も、美しさも、すべてが。そして時がくると、星の子らはさらに遠くへと旅立っていく。ひとつとして同じ道はないが、互いの灯が灯台となり、道を照らしてくれる。

だからお前も、自分の灯をしっかりと抱いて進んで行きなさい」

こう説きながら、おそらく自分が旅を終える日はそう遠くないだろうと、赤い星は感じていた。自分を駆りたてるもの。星の運行を操る大きな見えぬ手のようなものが、今夜、自分とこの若い星をひき合せたのだ。

小さな星は何も言わずに手の中の青い灯を見つめていたが、わかれ道にさしかかると、こう告げた。

「この先わたしは、ちがう道を行かねばなりません。ですが、もう嘆くことはないでしょう。今夜、わたしは貴方という灯台を見つけた」

そして、星々は別れた。それぞれの旅へ。それぞれの灯を抱いて。

(これはいつか、銀河のほとりでかわされた小さな対話の物語。

旅するすべての魂たちに、この手紙を捧げる)